2026年11月8日　子ども祝福式

説教題『聖霊と火のバプテスマ』マタイによる福音書３章11～17節

主任牧師　加藤　誠

「わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水でバプテスマを授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。…その方は、聖霊と火であなたがたにバプテスマをお授けになる。」（マタイ3章11節）

主イエスが神の国の福音を宣べ伝え始める前、バプテスマのヨハネが「悔い改めのバプテスマ」を宣べ伝えていました。「悔い改め」とは「神に背を向けていた者が百八十度方向転換して神にまっすぐ向かうこと」。ですからヨハネの「悔い改めのバプテスマ」は「自分が神の御心にどれだけ背を向けてきたかを自覚し、方向転換して、神の御心に向かう歩みを始めるバプテスマ」でした。

ヨハネはエッセネ派に属していたと言われていますが、エッセネ派では毎日神の前に我が身を清めるため各人が水槽に身を沈めたそうです。そのエッセネ派の儀式は毎日「自分で沐浴する」ものだったのに対し、ヨハネのバプテスマは「神への方向転換のバプテスマ」を「一度きり」「ヨハネから受ける」ところに特徴がありました。

そのヨハネのもとに主イエスが来られて「自分もバプテスマを授けてほしい」と言われたので、ヨハネは大変驚きます。というのも、ヨハネは「わたしは水でバプテスマを授けているが、後から来る方が自分よりも優れた聖霊と火のバプテスマを授ける」と語っており、主イエスを前にした時、「このイエスこそ、その方だ」と霊的直観的に理解したからです。ヨハネは「どうしてわたしがあなたにバプテスマを授けられましょうか」と固辞しますが、主イエスは「正しいこと（＝神の御心に適うこと）を行うのは我々にふわさしい」と言われて、ヨハネからバプテスマを受けられたのでした。「悔い改めのバプテスマ」は、神の御心に背を向けてきた人のバプテスマですから、日々神の御心を生きている主イエスには必要ないはずです。しかし主イエスは御自分も「悔い改めのバプテスマが必要だ」と考えられた。このことは主イエスがどれだけ御自分の罪（神の御心に従いきれない自分）を厳しく見つめておられたかを示しています（例：マタイ５：21～、５：27～、ゲッセマネの祈りなど）。神と一体となりながらも葛藤や恐れを抱えて歩まれた主イエス。人として生きる主イエスがご自分の罪を見つめるまなざしはそれほど厳しいものだったのです。主イエスにとっては「神の前に悔い改めを必要としない義人、罪なき者は一人もいない。皆が罪人！」でした。

その主イエスが授けられるバプテスマ、ヨハネの「水のバプテスマ」よりも優れた「聖霊と火のバプテスマ」とはどのようなものなのでしょうか。実は主イエスは弟子たちにも人びとにもバプテスマを授けておられません。復活後に主イエスが弟子たちに「人びとにバプテスマを授けよ」と命じられましたが、その時も、その後も、主イエスは弟子たちにバプテスマを授けておられません。ではいったいいつ、どのような形で、主イエスは「聖霊と火のバプテスマ」を弟子たちに授けられたのでしょうか。

一つの有力な答えは「聖霊と火のバプテスマが実現したのはペンテコステの時だ」というものです。それは主イエスの昇天後のことですが、「ペンテコステの時に主イエスが天から聖霊を注いで弟子たちにバプテスマを授けたのだ」という理解です。

しかし、わたしは少し違う理解を持っています。「主イエスの聖霊と火のバプテスマとは主イエスの十字架と復活の出来事のことだ」という理解です。聖書で「火」は「私たちの罪を裁き、清めるもの」であり、「聖霊」は「枯れた骨のように命を失った私たちを新しい命に起こす神の力」です。それを考える時、弟子たちは主イエスの十字架と復活において「聖霊と火のバプテスマ」を授けられたと言えるのではないでしょうか。弟子たちは主イエスの十字架において、自分たちの罪（神に従いきれない弱く、愚かな自分）を徹底的に示され砕かれました。しかし同時に十字架において、彼らの罪は清められたのでした。そして、自らの罪に砕かれ立ち上がれなくなった弟子たちに復活の主が聖霊の息吹を吹きかけてくださった時、彼らは「神の愛に生かされる新しい人」として起こされていきます。この弟子たちを見る時、「主イエスの聖霊と火のバプテスマ」とは「十字架と復活の出来事」であり、このバプテスマを通して、弟子たちは罪を裁かれ、清められ、新しい命に起こされ、キリストの救いを告白して生きる者としての一歩を歩み始めたと、わたしはそう受け止めています。

ヨハネは「悔い改めのバプテスマ」という「水によるバプテスマ」を授けました。これはいわば、私たち人間の側の「悔い改めの決意のバプテスマ」と言えるでしょう。しかし、私たちの罪は、私たちの決意で清められるようなものではありません。私たちの根深い罪を清めるのは、十字架にあらわされた神の愛と赦しです。弟子たちは十字架の前までは「自分の決意・信仰で主イエスに従っている！」と思っていました。しかし、弟子たちの決意・信仰は十字架で吹き飛ばされてしまいました。私たちの信仰はその程度のものなのです。「水のバプテスマ」では救われ切れない、ほんとうに根深い罪を私たちは抱えている。その自らの罪深さを思い知らされた時、十字架の愛と赦しのありがたさ、復活の主の慈しみと希望のありがたさを彼らは体験していった。まさにそれが主イエスが授ける「聖霊と火のバプテスマ」だったのです。

先ほど子ども祝福式をしましたが、弟子たちが母親に抱かれた子どもたちを叱り飛ばしたとき、主イエスは厳しく弟子たちを戒め、子どもたちを抱き上げて「神の国はこのような者たちのものだ」（マルコ 10：14）と祝福されました。この時点で、弟子たちはまだ自分たちの信仰のもろさに気づいていません。子どもたちを上から見下ろしています。しかし実は、自分たちのほんとうの姿は、主イエスに抱き上げられた子どもと同じ。その何もできない子どもが喜ばれ、祝福される神の国の福音のありがたさに気づいていません。今日、先ほど神さまの祝福の祈りを受けた子どもの姿は、そのまま神の前の私たちの姿です。根深い罪を抱え、神の御心に従いきれない者を赦し、清めて、新しい命に生かしてくださる、神の国の福音を、子どもたちと一緒に喜びながら受けて、分かち合っていきたいのです。